

書評

奥村みさ・郭 俊海・江田優子ペギー (2006)

『多民族社会の言語政治学—英語をモノにしたシンガポール人のゆらぐアイデンティティ』(ひつじ書房)(2006年11月20日初版1刷)

三好 重仁

シンガポールは言語的に不思議な国である。周辺のアジア諸国が旧植民地からの独立時には、先住民言語または現地で優勢な広域言語を国語や公用語としたのに対して、シンガポールは植民地語である英語を4つの公用語(マレー語、華語、タミル語、英語)の中でも第1公用語にしているのである。これはどのような理由によるものなのだろうか。

本書は、国際関係論、バイリンガル教育、社会言語学等の異なる学問的背景を持つ3名の著者による、シンガポール共和国における言語政策についての多面的取り組みの成果である。「あとがき」にもあるように、本書執筆の意図は、そのタイトル中の「多民族社会、政治社会、ゆらぐアイデンティティ」等のキーワードに集約されている。本書を手にする日本人読者にとりわけ印象的なキーワードは、「英語をモノにしたシンガポール人」であろう。特に、「英語が使える日本人」育成のための行動計画をいまだ作成中の関係者にとっては、わずか40年間で、英語が学校での教育言語であり、小学校1年生の家庭で話す言語が2004年では50%にまでなっている現状(p.29)は驚異的で、シンガポールは事実上、英語母語話者国(ENS)と見なすことも可能であろう。確かに、「シングリッシュ」と揶揄される下位語から上位語である標準英語が使用できる階層までの連続体はあるだろうが、それにしても、母語ではない英語をどのようにしてこれほどまでに習熟できたのであろうか。

この疑問に対する解答は、第1部「シンガポールのバイリンガル政策」第1章「教育システム」、第2章「シンガポールの英語史」に詳しい。例えば、英語が学校教育の媒介語になったのは1980年だが、「シンガポールの英語のルーツ」を辿ると、海峡華人集団の英語系学校や英語を媒介とする女学校の卒業生たちが家庭を持ち、1920年代から徐々に英語を第一言語とする新世代が増加していったとの指摘がある(p.44)。つまり、その前の世代から英語を教育言語としてもよい下準備が徐々に進められていたのである。かくして、端的に言えば、人口400万人というアジアの小国ながら、世界貿易の中継地点に位置する地勢的優位性を最大限に生かそうと決意した、Lee Kuan Yew(李光耀)を代表とする人民行動

党（PAP）の強力な指導力により推進されてきた英語教育重視政策は成功し、例えば、一人当たりの GNP では、隣国のマレーシアの5倍以上になっているなどの実績が見られる。

しかし、物事には2面性がある。確かにこれまでのところ、シンガポールの2言語政策（教育言語である英語ともう一つの公用語の学習）は成功しているどころか、1979年に「華語普及キャンペーン」を開始するほどに英語が浸透し、アイデンティティとしての民族語意識が特に若者の間では希薄になってきているという現状がある。この面については、本書の第2部「言語とアイデンティティ」第3章「シンガポール人の民族的・言語的風景」、第4章「英語とアイデンティティ」、第5章「華語とアイデンティティ」に詳細があり、本書の醍醐味は、むしろこの第2部の著者によるインフォーマントとの面接記録にある。タン一家（仮名）のルーツとことば、4人のシンガポール大学生へのインタビュー、シンガポール国立大学生280名による多言語使用状況に関するアンケート調査結果などだが、とりわけ、多言語使用についての内省報告は興味深い。英語による教育が行き過ぎた結果、日本人学生に「十二支」について英語で説明した華人教師は、普段から高校生に英語で自分の民族文化について説明しているとのエピソード（p.127）からは、シンガポールの若者は指導者層が期待している出身民族アイデンティティから、すでに「シンガポール英語」を母体とした「シンガポーリアンアイデンティティ」への移行期にあることが伺われる。この揺れ動くアイデンティティ問題とともに、もう一つの問題は、シンガポールのエリート尊重主義、小学校修了時統一試験（PSLE）など見られる学校教育の早期からの能力による振り分け制度である。この英語で文句が言えない約77万人の「サイレント・マジョリティ」（p.134）への対処は、今後も気がかりな点である。また、「華語普及キャンペーン」（Speak Mandarin Campaign）の結果、広東系、福建系、三江系合計8種類の中国語方言は「普通話」とはやや異なる「華語」に一本化されたが、家庭内で英語を常用する小学生が50%に急増している現在、近い将来、中国語方言の言語消失が起こることは容易に予想される。

著者は3名とも現地でのフィールドワークを基にして、読者に分かりやすく、自分の考えを伝えようとしている。しかし、一歩踏み込んだ記述の一部には疑問が出てくるかもしれない。例えば、「英語に流暢なほど、英語メディアによって生活世界の多くが形成されてしまい、物理的にはシンガポールに居住していながら、ライフスタイルは英語圏文化に属しているというアイデンティティのねじれ現象が生じている」（pp.131-132）とあるが、これは英語をモノにしたシンガポール人だけに特有ではなく、インドやフィリピンなどの英語に堪能な ESL 圏でも、また、日本のような EFL 環境でも、CNN などの英語メディアに

常時さらされている人々にも言えるのではないだろうか。「英語に堪能なシンガポール人のアジア観が英語メディアによって形成されている」(p.125)との指摘にも同様の反論があるかもしれない。表記面では、第5章の華語の具体例が簡体字なので発音表記があれば、読者には読みやすかったかもしれない。3つのコラム、「哈日族」、「アメリカ英語の浸透—きょうはガンボの気分?」、「ハートランダーとコスモポリタン」も本文以上に興味深い。1965年生まれの新興国家シンガポールの加速度的な変貌は驚異的である。家庭内で英語を常用する小学生が親の世代になった時、シングリッシュはどのように変貌しているだろうか。

「あとがき」にあるように、著者3名が究極的に目指したのは、英語という西洋の言語を身につけたアジア人の姿を日本の読者に提示し、表面的な成功の影で、内面的にどのような問題や葛藤を抱えているかを伝えることであった。1966年から開始されたバイリンガル教育のうちの英語については、シンガポール英語は地域標準英語 (Local Standard English) となり、英語教師の輸出やアジア各地から留学生を呼び込むほどまでに発達を遂げている。他方、アイデンティティの拠り所としての華語教育はそれほどの発達は見られず、Mentor Minister Lee Kuan Yew 自身がバイリンガルは特別な才能を持ち、そのようになろうと強い決意を持っている場合にだけ可能だろうという意見をいっているほどである。現在、日本では早期英語教育を導入しようとしている段階にあるが、本書は読者に日本の言語政策や英語教育を見つめ直す一つの機会を提供している。

(東京電機大学工学部英語系列)